

保育者の絵本選択における言語表現重視の傾向とその課題 —保育者養成課程における絵本ビブリオバトルの実践から—

鈴木貴史

帝京科学大学 教職センター

The Problem of the Selection Picture Books Emphasizing Linguistic Expression
in Early Childhood Education.

Takashi SUZUKI

Keywords : 絵本、ビブリオバトル、保育者養成課程、保育内容言葉、国語教育

1. はじめに

本報告は、児童教育学科幼保コース2年次を対象とした、「保育内容（言葉）I」における絵本ビブリオバトルの実践の結果から保育者養成課程に学ぶ学生の絵本選択における言語表現を重視する傾向について、国語教科書との比較を通して検討したものである。

本実践は、保育者を目指す学生たちがこれまで身に付けてきた絵本を選択する技術を披露するための機会として企画した。その対象は、児童教育学科幼保コース2年生の計104名(50名、54名の2クラス、ただし2名の再履修学生を含む)である。当該授業は、15回の授業の7回目で行った。6回目までの授業において、学生の絵本を選択する視点を磨くため徐々に対象年齢を上げながら代表的な絵本を紹介してきている。そこでは、たとえば谷川俊太郎(作)・元永定正(絵)『もこもこもこ』や金関寿夫(作)・元永定正(絵)『カニツンツン』などのように、ストーリーが明解でない絵本もあえて取り上げ、こうした絵本にも学生が触れていけるよう配慮してきた。

さらに、学生同士による読み聞かせ練習を通して、学生たちは保育における絵本の効果についても考察を深めてきている。本実践を行う事前準備の課題として、最低限5冊の絵本に目を通し、それぞれの絵本の分析をまとめて提出する作業を課している。

(1) ビブリオバトルとは

ビブリオバトルとは、自分の選んだ本を持参し、その本の魅力について他者に説明するという、本来は書評ゲームである¹⁾。しかし、本実践において

は、これを変則的に運用し、それぞれが持ち寄った絵本を紹介するだけでなく、その絵本の読み聞かせも行った後、最も子どもたちに読ませたい本を選択するというルールで実施した。

(2) テーマ：「いのち」または「どうぶつ」に関わる絵本

本学では、「いのちをまなぶキャンパス」を掲げている。そこで、絵本選択のテーマとして、「いのち」または「どうぶつ」に関連する絵本とした。

(3) ルール

学生に示したルールは下記の通りである。

- ①一人一人が絵本を一冊持参する。
- ②まず予選として、一人ずつその絵本の魅力を紹介する。紹介を終えた後に、絵本を一人ずつ読む。
- ③予選においては、「どの絵本を最も紹介したいか」「どの絵本を最も子どもたちに読ませたいか」をグループ内の投票で決める。
- ④決勝として、各グループの代表が全体の前で絵本の魅力を紹介し、読み聞かせを行う。「どの絵本を最も紹介したいか」「どの絵本を最も子どもたちに読ませたいか」について全員の投票を行い、優勝チーム(チャンプ本)を決定する。

なお、対象は幼稚園の年中および年長児にあたる4、5歳を想定し、これまで授業内で取扱った絵本は除外することをルールとして付け加えている。

2. 絵本ビブリオバトルの結果

本実践において、予選で選出された各グループの代表絵本は表1、表2のとおりである。グループ代表の絵本は、全18冊のうち、1990年代以降に出版された絵本が11冊選ばれ、比較的新しい絵本が好まれる傾向がみられた。これは、それまでの授業において、長く読まれてきた定番絵本に多く目を通してきたことの反動として、挿絵に関して親しみやすく感じられる新しい絵本が選ばれる傾向が生じたものと思われる。また、グループ代表に選出された絵本では、そのストーリーに偏りはみられず、「どうぶつ」または「いのち」に関わる幅広い内容が選択されている。

グループ代表絵本を選出後、グループの代表者が全体の前でこれを紹介して読み聞かせを行い、全員で投票を行った。その結果、二つのクラスで学生が選んだ絵本は、まずクラス1の第1位は、『ずーとずっとだいすきだよ（以下、『だいすきだよ』）』（14票）であった。大差の2位が『しろちゃんとはりちゃん（以下、『しろちゃん』）』（6票）、3位では、『がい

こつ』（5票）と『しろくまのパンツ』（5票）が並んだ。クラス1での『だいすきだよ』は、2位以下が一桁の得票だったのに対して、他を圧倒して支持を集めたといえる。

一方のクラス2においても、1位はクラス1と同様『だいすきだよ』（12票）であり、同点1位に『わすれられないおくりもの（以下『おくりもの』）』（12票）が選ばれている。第3位は、『りんごがひとつ』（8票）であった。クラス2においても、3位以下が一桁の得票だったのに対し、1位の2冊はこちらも圧倒的な支持を集めたといえる。

なお、2クラスの各9グループから選出された計18冊の絵本のタイトルのうち、両方のクラスで代表に選出されている絵本も『だいすきだよ』の一冊のみである。このことから、この絵本が他と比べて突出して学生を引きつけていることが確認できる。

さて、本実践においては、授業の最後に学生の感想を書かせている。ここでは、「自分だったら手に取らない絵本に意外な魅力があることがわかってよ

表1 クラス1 グループ代表選出絵本

	タイトル	作者	出版社	年
A	よるくま	酒井駒子	偕成社	1999
B	がいこつ	谷川俊太郎, 和田誠	教育画劇	2005
C	きょうのおべんとう なんだろな	岸田衿子, 山脇 百合子	福音館書店	1994
D	しろくまのパンツ	tupera tupera	ブロンズ新社	2012
E	ずーと ずっと だいすきだよ	ハンス ウィルヘルム	評論社書店	1988
F	ちいさなねこ	石井桃子, 横内襄	福音館	1967
G	おいしいおと!なんのおと?	ふくざわ ゆみこ	ひかりのくに	2013
H	ほしのしずくがおちました	まつむら まさこ	ロッテ (非売品)	2007
I	しろちゃんとはりちゃん	たしろ ちさと	ひかりのくに	2013

表2 クラス2 グループ代表選出絵本

	タイトル	作者	出版社	年
A	さる・るるる	五味太郎	絵本館	1980
B	ねずみくんのだいすきなもの	左近蘭子, いもと ようこ	ひかりのくに	2013
C	ベルとブゥ おやすみなさいの じかん	マンディ サトクリフ, ひがし かずこ	岩崎書店	2013
D	わすれられないおくりもの	スーザン バーレイ	評論社	1986
E	ホイップペアー	ロコ・まえだ	柳原出版	2005
F	ぐるんぱのようちえん	西内ミナミ, 堀内 誠一	福音館書店	1966
G	りんごがひとつ	ふくだ すぐる	岩崎書店	1996
H	ずーと ずっと だいすきだよ	ハンス ウィルヘルム	評論社書店	1988
I	どうぞのいす	香山美子, 柿本幸造	ひさかたチャイルド	1981

かった」、「知っている絵本でも他の人に読んでもらうと印象が違うことがよくわかった」、「今回、新しく知ることができた絵本をぜひ、実習で生かしたい」などの感想が多くみられた。特に、絵本のタイトルを挙げていないで述べた感想もみられたが、これらの感想からも本実践を通して『だいすきだよ』や『おくりもの』などを知らなかった学生の心にも訴えるものが大きかったことを窺うことができる。

3. 絵本選択における言語表現の重視

本実践において、両クラスで2位までに選ばれた『だいすきだよ』、『しろちゃん』、『おくりもの』の3冊に限定すれば、その特徴として、いずれも「死」について考えさせる点で共通している。たとえば、『だいすきだよ』は、主人公の「ぼく」が、飼い犬エルフィーの死後、それまでのエルフィーとの思い出を回想しながら物語が展開し、読み手にエルフィーへの深い愛情を感じさせる物語である。

本実践のテーマは、「いのち」または「どうぶつ」という広範囲なテーマ設定であり、前述のとおり、グループ代表の段階では多様な選択がなされていた。ところが、グループ代表絵本の紹介後、対象学生にとっては、両クラスでそれぞれ3位に選出された『しろくまのパンツ』や『りんごがひとつ』のような「どうぶつ」を題材とした楽しい絵本よりも、「いのち」から連想される「死」にまつわる感動的な物語に惹かれていく傾向が読み取れる。さらに、既に紹介したように実践後の感想においても、こうした絵本を保育の場で読んでみたいと思う学生が数多く存在している。

しかし、ここで見落とされがちな視点は、成人から評価の高い絵本が必ずしも幼児からの心を捉えることができるわけではないということであろう。たとえば松居直は、絵本選択の視点として、「子どもの側から発想されている絵本」と「おとなの側から発想されている絵本」という視点の分類を提示している²⁾。松居によれば、この分類は絵本の優劣の問題ではないものの、後者については、「子どもはかくあるべし、人間はかくあらねばならぬ」といった、やや押しつけ気味の観念的な絵本が多い」と指摘している。

本実践における学生の絵本選択も、松居の指摘する後者の視点に立った絵本選択の傾向を示していることができる。その根拠の一つとして、この3冊のうち、比較的最近出版された『しろちゃん』を除き、残りの2冊は小学校における現行の国語教

科書に掲載されていることが挙げられる³⁾。

それでは、国語教科書に掲載された絵本にはどのような特徴がみられるのか確認していきたい。石原千秋は、現代の国語教育について、「教科の目的は、広い意味での道徳教育」とし、「国語ができるということは道徳が身に付いているということの意味し、読解力が身に付いたということは道徳的な枠組から読む技術が身に付いたということの意味する」と論じている⁴⁾。具体的に、石原は小学校における国語教科書の特徴として、自然・動物重視、父親不在、平和教育などを挙げている⁵⁾。こうした国語教育における教材選択の意図こそ、「おとなの側からの発想」であり、ここには教育政策者側の意図が反映されているといっていよう。

そのため、絵本が国語科の教材として教科書に掲載された場合、それが道徳的に読まれる可能性を指摘することができる。すなわち、国語教育においては、絵本の自由な読み方が制限されるという問題が生じるのである。この具体的な例としては、一年生の国語教科書における「おおきなかぶ」が挙げられる⁶⁾。この「おおきなかぶ」は、2016年1月の時点で発行されている他のすべての出版社（光村図書、教育出版、東京書籍、学校図書、三省堂）による1学年用国語教科書に掲載されている定番教材である。現行の光村図書の『小学校国語学習指導書1上 かざぐるま（以下「指導書」）』によれば、「おおきなかぶ」の国語教材としての教材観は、「栽培の喜び、協力の喜び、収穫の喜びにあふれた物語」として紹介されている⁷⁾。

その一方で、松居直は、絵本『おおきなかぶ』の読まれ方について、「ときとして協力ということを教える目的に利用されたりもしますが、この話はそんな道徳的なことをしらせるための話ではありません」、「そんなふうに使われ、指導されたとしたら、この絵本はあまり価値がありません」と主張し、ユーモア、サスペンス、訳文のリズムなどの魅力があると説いている⁸⁾。このように、登場人物の心情を読み取らせようとする心情主義的な読み、さらには、「みんなで力を合わせればできる」という道徳的な教材としての読まれていくことについては、松居のほかにも、前述の石原や蓼沼正美などによっても問題視されている⁹⁾。

そのほかに松居は、「おおきなかぶ」の挿絵の魅力について、「画家のデッサン力のある表現、とりわけ人物のすばらしい描き方と、物語に対する画家の解釈の仕方、読み取りの深さ」の重要性を説

き、「絵を見ただけで、子どもたちが物語を理解できる」ことにあるとその挿絵について絶賛している¹⁰⁾。要するに松居は、道徳的な文学教材として読まれることを批判し、挿絵も含めた幅広い視点で絵本を捉えているのである。

しかし、これが国語の教材として文学的に扱われる場合、挿絵は添え物のような扱いを受けることになり、松居の説くような挿絵の魅力が焦点化されることは稀である。つまり、この「おおきなかぶ」の例にみられるように、絵本の読み聞かせにおいて国語教材と同様に文学的に捉えられると、挿絵が軽視されるという問題が生じるのである。

国語教育で絵本を文学的に捉え、挿絵を軽視することは、言語を学習することを主目的とする教科の特性上当然のことといえる。しかし、保育における絵本についてはこれと同様ではない。その保育における絵本とは何かについて、リリアン・H・スミスは、下記のように述べている¹¹⁾。

幼児と絵との関係は、まずその絵からストーリーをくみとることにある。子どもは、自分では読むことのできない物語を、その絵が語ってくれることを要求する。絵は、かれにとっては、読書の最初の入口であり、絵を通して、子どもの興味はひきつけられる。

つまり、ここでスミスが述べているのは、絵本においては、言葉だけではなく挿絵によっても語られるという点である。とりわけ、自分で文字を読むことが難しい幼児期においてその意味するところは大きいのである。またスミスは、こうした絵本における文章と挿絵の関係について、下記のように述べる¹²⁾。

絵本とは、二つのメディアによってなりたつものである。つまり、ことばと画材である。絵本を一体のものとしてみる時、文と絵とは、これが融合して、絵本に一つの統一と性格を与えるものであるから、おなじ比重をもつことになる。

このように、絵本とは文章と挿絵が同じ比重をもっているとされるが、国語教材として選択されている絵本は、文章のみを抽出して児童文学と同様に言葉によって物語を捉えようとするため、挿絵が軽視され、本来の絵本の持つ魅力が軽減される可能性が生じるのである。

本報告における絵本ビブリオバトルの結果から、保育者を目指す学生たちが活用する絵本の選択において、道徳性を求める「おとなの側からの発想」により、『だいすきだよ』、『おくりもの』のように国語教材として採用される文学的な作品に惹かれていく傾向がみられた。このように保育における絵本選択で絵本の言語表現に偏重した場合、国語教材としての「おおきなかぶ」の例のように、挿絵や言葉のリズムなどその絵本のもつ子どもにとっての魅力が見落とされてしまう可能性が生じるのである。

4. 絵本における文章と挿絵の関係

本節では、絵本の言語表現重視の傾向の問題点を明確にするため、絵本ビブリオバトルで優勝した『だいすきだよ』とこれが掲載された国語教科書(教科書では、「ずうっと、ずっと、大すきだよ」)との比較を通して、絵本における文章と挿絵の関係について考えてみたい。

絵本と児童文学(幼年文学、幼年童話など)の区別は、一般的には明確であるとはいえないものの、保育に関する法令上は、一定の区別がつけられている。たとえば、学校教育法23条では、言葉の領域について、「日常の会話や、絵本、童話等に親しむことを通じて、言葉の使い方を正しく導くとともに、相手の話を理解しようとする態度を養うこと」とあり、「童話」という表現ではあるものの絵本と区別している。宮川健郎は、「さし絵がつけられてはいるけれども、本来は、絵がなくても成り立つのが児童文学」であり、「逆に文がなくても成り立つ」のが絵本であるとする¹³⁾。本報告においてもこれに準拠し、この二つを区別することとする。すなわち、すべての見開きページに挿絵が含まれているものを「絵本」とよび、挿絵が一部のページにのみ掲載され、見開きが文章だけで構成されるページを含むものを「児童文学」とよぶこととする。

『だいすきだよ』は、1988(昭和63)年に翻訳絵本として出版され、1992(平成4)年に早くも国語教科書に掲載されている。2014(平成26)年版の『指導書』における教材観では、「児童は、主人公「ぼく」の心優しさにひかれ、柔らかなタッチの美しい挿絵を手がかりに、興味をもって作品を読み進めて行くであろう(傍点：鈴木)」と述べてその児童への心理的な効果について触れている¹⁴⁾。『指導書』では、初回の授業で教師の読み聞かせを行うように示されており、こうして、導入で読み聞かせを行うことで、物語との出会いを大切にしている。

しかし、ここで傍点部にあるように「挿絵を手がかり」に読み進めていくとあるにも関わらず、絵本を教科書に掲載した場合、装丁、紙幅の相違などもあり挿絵が削減され、レイアウトが大幅に変更されることになる¹⁵⁾。文章と挿絵の関係が大幅に崩れてくるため、絵本の見開きから受ける印象と教科書のそれとでは印象に違いが生じてくるのである。

まずは、『だいすきだよ』が教科書にはじめて掲載された1992(平成4)年版の光村図書『こくご一下ともだち(以下『H4年版』)]を使用してその問題点をみていきたい¹⁶⁾。絵本では、扉部分を除き、見開き15場面(計30ページ)で構成されているのに対して、教科書の本文は見開き7場面(最初と最後は見開きの片側のみで計12ページ)に圧縮されている。そのため、挿絵は削減され、文章とそれに対応する挿絵の関係が変更されている。たとえば、絵本における第2場面は、下記の資料1のようになっている¹⁷⁾。

資料1 ハンス・ウィルヘルム、久山太市訳『ずーっとずっとだいすきだよ』評論社、1988年 第2場面

ぼくたちは、いっしょに大きくなりました。
でも、エルフィーのほうが、ずっとはやく、大きくなったよ。
ぼくは、エルフィーのあったかいおなかを、いつもまくらにするのが、すきだった。
そして、ぼくらは、いっしょにゆめを見た。

資料1のように第2場面では「ぼく」の乳幼児期の回想であり、絵本では、これに対応する計六つの挿絵が掲載されている。これらの挿絵はすべて乳幼児期からの「ぼく」と「エルフィー」の関係だけを描いたものである。しかし、『H4年版』(pp30-31)では、絵本における第2場面の文章が、つぎの第3場面における「おにいさんやいもうとも、エルフィーのことがだいすきだった。でも、エルフィーはぼくの犬だったんだ」という文章、さらにこれに対応する「エルフィー」を囲む「きょうだい」たちを含めた挿絵とともに同じ見開きに掲載され、連続した場面のように描かれている。

こうした教科書におけるレイアウトの変更により、絵本では、第2場面の文章の冒頭にある「ぼくたち」の指し示す対象について、六つの挿絵によって「ぼく」と「エルフィー」の関係であることが強調されているのに対し、『H4年版』では、「きょうだい」の挿絵と同じ見開きに掲載されたことで、ここでの「ぼくたち」が「きょうだい」も含めた関係であるとの誤読を与える可能性がある。

つまり、『H4年版』において、「ぼく」と「エルフィー」が幼い頃から時間と空間を共有していたことの描写である挿絵が削除されたことにより、「ぼく」の成長の傍らには、他の「きょうだい」と比較して長い時間、「エルフィー」がいたという印象が薄まっている。

また、第3場面の最後にある「でも、エルフィーはぼくの犬だったんだ」という一文は、「他のきょうだいの犬ではなく」という意味が込められていると考えられる。しかし、前述のとおり『H4年版』では、第2場面の挿絵の削除により、「ぼく」と「エルフィー」の関係が際立っていないだけでなく、他の「きょうだい」を含めた挿絵だけが掲載されたことにより、この一文における「ぼく」と「エルフィー」の関係が弱められてしまっている。

このように『だいすきだよ』の物語の特徴の一つとして、「ぼく」と「エルフィー」の関係が、他の家族との関係に比べて相対的に強い結びつきであったことを強調している点を挙げることができる。しかしながら、『H4年版』におけるレイアウトの変更は、この第2場面、第3場面の例のように、絵本における「ぼく」と「エルフィー」の特別な関係とは異なる印象を与える可能性が生じている。

こうしたレイアウトの変更により、「ぼく」の気持ちの読み取りに影響を与えると思われる場面はほかにもある。たとえば、第9場面では、「ぼくたちは、エルフィーを、じゅういさんに、つれていった」、「でも、じゅういさんにも、できることは、なにもなかった」という場面がある。絵本のこの場面では、「ぼく」と両親と獣医が「エルフィー」を囲んでいる挿絵と「ぼく」だけが病院から一人で歩けない「エルフィー」を荷車に乗せ、肩を落としながら連れて帰る挿絵の二つの絵が見開きで描かれている。しかし、『H4年版』(pp34-35)では後者の「ぼく」が「エルフィー」を連れて帰る挿絵が省かれている。絵本のこの場面では、文章による描写がないため、『H4年版』において挿絵が削除されたことにより、この場面ごと物語から消去されてしまっているのである。

また、第10場面の「①まもなく、エルフィーはかいだんも、のぼれなくなった」、「②でもエルフィーは、ぼくのへやでねなくちゃいけないんだ」という文章について、絵本では、①の文に対応する階段の下で躊躇している「エルフィー」を「ぼく」が促す挿絵と②の文に対応する「ぼく」が「エルフィー」を抱えて階段を昇る挿絵の二つを掲載している。しかし、『H4年版』(pp34-35)では、①の文に対応する挿絵が

省かれ、②の文に対応する挿絵のみが掲載されているため、この二つの挿絵から感じ取れる「ほく」の気持ちが伝わりにくくなっている。

さらに、『H4年版』の最大の問題として、この物語の最も象徴的な場面といえる第11場面のレイアウトの変更がある。第11場面は、資料2で示した文章とこれに対応する「ほく」が「エルフィー」に「ずーっと、だいすきだよ」と声をかけている挿絵と、「ほく」と「エルフィー」が同じ寝室で眠っていたことを示す挿絵の二つが掲載されている。しかし、『H4年版』(pp36-37)では、資料2と同様の第11場面の文章と第12、13場面の「エルフィー」の死および埋葬の場面の文章がすべて一つの連続した文章として同じ見開きに掲載されている。加えて、第11場面の二つの挿絵を削除し、第11場面の文章と同じ見開きに掲載されているのは、第13場面の家族全員による埋葬場面の挿絵のみである。

**資料2 絵本 ハンス・ウィルヘルム、久山太市訳
『ずーっとずっとだいすきだよ』評論社、1988年 第11場面**

ほくは、エルフィーに、やわらかい
まくらをやって、ねるまえには、かならず
「エルフィー、ずーっと、だいすきだよ」って
いってやった。
エルフィーは、
きっとわかってくれたよね。

つまり、第11場面における「ほく」と「エルフィー」だけで過ごした空間の描写については文章だけの描写にとどまっていることから、「ほく」が毎晩、「エルフィー」との間で特別な時間と空間を共有していた場面がイメージしにくくなっている。ここでも第2、3場面と同様に「ほく」と「エルフィー」の関係が強調されないという問題が生じているのである。

その結果、第13場面における「エルフィー」の死に対して、「ほくだって、かなしくてたまらなかつたけど、いくらか、きもちがらくだった」、「だってまいばんエルフィーに、「ずーっと、だいすきだよ」っていってやっていたからね」という他の家族と異なる「ほく」の気持ちが十分に表現しきれていないのである。このように、『H4年版』では、文章と挿絵の関係が大きく崩れてくるため、絵本の見開きから受ける印象と教科書とでは印象の違いが生じてくるのである。

以上のような問題点は、平成26年の光村図書『こくご一下 ともだち(以下『H26年版』)』では、多少

は改善されている¹⁸⁾。『H26年版』では、『H4年版』から挿絵が差し替えられ、本文のレイアウトは見開き5場面(計10ページ)に変更されている。

変更点として、『H26年版』(pp52-53)では、第2場面の「ほく」の乳幼児期からの回想である六つの挿絵が掲載されたことにより、「ほく」と「エルフィー」が「いっしょに大きくなりました」の部分がイメージしやすくなっている。しかし、こんどは第3場面における「きょうだい」たちに囲まれる「エルフィー」の挿絵が削除されたことにより、挿絵による「きょうだい」の描写がなくなっている。そのため、結果的にここでも「ほく」と「エルフィー」の特別な関係と他の「きょうだい」と「エルフィー」の関係の対比が強調されにくくなっている。

こうした挿絵の差し替えについて第9場面を例にとると、『H4年版』で削除されていた「ほく」が肩を落としながら病院から連れて帰る場面が、『H26年版』(pp56-57)では掲載されるようになった。しかし、こんどは絵本の第9場面と同じ見開きにあった両親と獣医の挿絵が削除されてしまったため、獣医に連れて行った「ほくたち」の「ほく」以外は誰がいたのかという情報を読み取ることが困難になっている。

また、『H26年版』(pp58-59)においても、最も重要といえる第11場面の挿絵は一切掲載されず、文章による描写のみである。つまり、『H26年版』においても、「ほく」が「エルフィー、ずーっと、だいすきだよ」と声をかける場面の挿絵が掲載されていないため、ここでも「ほく」と「エルフィー」の他の家族とは異なる特別な関係を絵本と同様には表現されていないのである。

以上みてきたように、この『だいすきだよ』の例にみられる絵本の国語教科書への掲載は、絵本の言語表現を抽出してこれを重点的に捉えるため、挿絵を二次的な情報として適度に省略することになる。これは、他の絵本でも同様であり、たとえば教育出版『小学国語3上 ひろがる言葉』における「わすれられないおくりもの」でも、絵本に掲載されている合計27の挿絵が半分以下の11に削減されている。

前節で紹介したスミスの考えに従うならば、こうした挿絵の変更は、原作絵本における文章と挿絵の均衡を崩すものであるといえる。これを言い換えれば、国語教科書への掲載は、絵本の挿絵を軽視し、言語表現を重視した児童文学への変換といえることができるだろう。

5. 結びにかえて

本報告は、「保育内容（言葉）」における絵本ビブリオバトルの結果において、対象学生が、小学校の国語教材として用いられている文学的な作品に惹かれていく傾向が読み取れたことから、最も票を集めた『だいすきだよ』を題材として、絵本と国語教科書の関係について考察を加えてきた。

こうした言語表現を重視した道徳的な絵本に惹かれ、保育における読み聞かせに取り入れていきたいという傾向は、「いのちをまなぶキャンパス」を掲げる本学に学ぶ学生として相応しい選択であるともいえる。しかし、保育者を目指す学生が注意すべき点は、国語教科書と同様の視点で言語を重点化して絵本選択を行うことであり、文学教材としての絵本の読み聞かせに陥ることである。言うまでもなく、国語教材における絵本には国語教材としての使命があり、それ自体は否定されるものではない。しかし、繰り返しになるが、保育における絵本は、文章と挿絵という二つのメディアが同じ比重で成り立っている。つまり、文学教材としての絵本の読み聞かせの弊害とは、絵本のもつ文章と挿絵の連関を断ち切り、原作の絵本とは異なる時間と空間が形成されていくことである。すなわち、絵本が児童文学と同様に捉えられ、原作絵本がもつ魅力に対して異質の捉え方がされる危険性を孕んでいるのである。

本実践の結果を踏まえ、保育者養成機関で学ぶ学生が絵本のもつ言語表現のみに捕らわれず、いかにして絵本選択の幅広い視点を育ていけるのか引き続き十分な検討が必要である。

引用文献 / 参考文献

1. 谷口忠大：ビブリオバトル 本を知り人を知る書評ゲーム，文芸春秋，東京，2013年。
2. 松居 直：絵本の力，日本エディタースクール，東京，1973年，p95。松居は、子どもの側から発想された絵本の例として、マリー・ホール・エッツ・まさき りりこ訳：もりのなか，福音館書店，1963年、中川李枝子・大村百合子：ぐりとぐら，福音館書店，1967年などを挙げている。
3. ハンス・ウィルヘルム，久山太市訳：ずうっと、ずっと、大すきだよ，こくご一下 ともだち，光村図書，東京，2014年、スーザン・バーレイ，小川仁央訳：わすれられないおくりもの，ひろがる言葉 小学国語3上，教育出版，東京，2015。
4. 石原千秋：国語教科書の思想，筑摩書房，東京，2005年，pp25-26。
5. 石原前掲書，pp74-104。
6. トルストイ，西郷竹彦訳：おおきなかぶ，こくご一下 ともだち，光村図書，東京，2014年。
7. 小学校国語学習指導書1上 かぎぐるま，光村図書，東京，2011年，p191。
8. 松居前掲書，pp85-89。
9. 蓼沼正美：組織される言説－「大きなかぶ」というメディア，国語国文研究100，1995年，pp41-58。石原前掲書，pp133-135。
10. 松居前掲書，pp85-89。
11. リリアン・H・スミス，石井桃子訳：児童文学論，岩波書店，東京，1964年，p205。
12. スミス前掲書，pp205-206。
13. 宮川健郎：国語教育と現代児童文学のあいだ，日本書籍，東京，1993年，p37。
14. 小学校国語学習指導書1下 ともだち，光村図書，2011年，p122。
15. そのほかの変更点として、犬の名前が「エルフィー」から「エルフ」に変更、使用漢字の変更、敬体から常体への変更などがみられる。本報告では、絵本に従い、犬の名前はエルフィーで統一する。
16. ハンス・ウィルヘルム，久山太市訳：ずうっと、ずっと、大すきだよ，こくご一下 ともだち，光村図書，1992年，pp29-41。
17. ハンス・ウィルヘルム，久山太市訳：ずうっとずっとだいすきだよ，評論社，東京，1988年。以後、本報告における第○場面は、すべて絵本における場面を指す。
18. ハンス・ウィルヘルム，久山太市訳：ずうっと、ずっと、大すきだよ，こくご一下 ともだち，光村図書，2014年，pp52-63。